2004年に稼働したエバ工業のベトナム工場(＝提供)

「量産品は追わず特殊仕様のシステムに取り組む」と語るエバ工業の中村研社長(写真左)

FMS構築に強み

エバ工業

第1回FMS展に出展

エバ工業(三重県東員町、中村研社長)は1つの生産ラインで製品の変更や多品種の製造に柔軟に対応する製造システムFMS(Flexible Manufacturing System)の構築に強みを持つ。

1979年にマシニングセンタ(MC)用自動パレット交換装置(APC)を開発し、製造に着手。メカトロテックジャパン(MECT)の前身で、83年に開催された第1回FMS展にもMC用APCを出展した。

APCの他、現在では自動ツール交換装置(ATC)も製造し、機械加工工場での長時間無人稼働を実現するためのFMS構築が事業の柱だ。

立体式のパレットストッカーやパレット交換装置、ロボット化に対応するための傾転段取り装置、50tの重量物に対応する自動搬送装置など、無人化システムや自動化セルを構築するための各種ユニットを提供する。

「10年でも20年でもお客さまに安心して使ってもらえる機械システムを提供する」

「お客さまの高品質で生産性の高いものづくりに貢献する」を企業理念に掲げる。

その上で中村研社長は「量産品は追わず特殊仕様のシステムに取り組む」と強調する。

本社に隣接する、延べ9万1915㎡に及ぶ本社工場には、大型の五面加工機や各種MC、ジグボーラーや門形平面研削盤、レーザ加工機などの切削加工機や、溶接まで自社で抱える。

日本の少子化に備え

本社工場に加え、2004年に稼働したベトナムのハイフォンにも工場を持つ。

世界経済のグローバル化を見据え、消費地での生産の重要性や、日本国内の少子化や市場の縮小で、従業員の採用が困難になるとの懸念を見据えた対応だ。

本社工場がある三重県北部は、名古屋市や豊田市から、高速道路を使えば自動車で40分ほどの立地で仕事をするには便利だが「将来の技術者を確保するのは困難と判断した」(中村社長)ためだ。

「エンジニアの卵が豊富なベトナムに進出し、工場は稼働したものの、加工などを委託できる良好な外注先がない。自給自足するしかなかった」と中村社長。そこでエバ工業は、溶接や塗装、鋳物や熱処理などの工場を増設し、各工程を自社でまかなうことになった。各種の部材も自社でストックする。

19年末からの新型コロナウイルス感染症の影響で、製造業各社が設備投資に二の足を踏み、工作機械業界にも影響が及んだ。エバ工業も21年夏から回復したものの、20年、21年と売上高を大幅に落とした。対して、現地でさまざまな加工を請け負うベトナム工場の稼働は好調で、今年は売上高が初めて本社を超える見込みだ。